

第41回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■小学校5年生の部 最優秀賞

自由にできない野球少年団

奥春別小学校 坪井 謙尚君



『瀬戸内少年野球団』。僕は、この一冊の本を選びました。僕がなぜ、この本を選んだかという理由は二つあります。一つ目の理由は、僕も野球をやっている、野球の事ならなんでも知っている、共通点が多いので話分かるかなと思ったからです。もう一つの理由は、野球の事が出てくるのが楽しかったからです。なので僕は『瀬戸内少年野球団』という本を選びました。

僕は、野球の事が出てくると思っても楽しませんでした。でも、目次を見てみると、『シブは走る』『かほちやの花』『古いボール』『すみぬりまつり』などの見出しが書いてあり、ぜんぜん野球の事が出てこなかった、題名と違っていると思いました。でも、『二本足の怪人』『一本刀里帰』『など、意味の分からない題名がたくさんあり、すごくおもしろそうでした。』

『一ページ目を見てみると、何々やて。』『何々のんか。』『咲いとった。』など、大阪弁みたいな話し方が出てきて、おもしろかったです。

本を読んでいると、戦争が終わった時の話がたくさん出てきました。すごくびっくりしたことがあります。

た。それは、体全体や教科書にすみをぬっていたことです。ほくも書写の時間に少し、教科書にすみがついたことがありますが、でも何のためにわざと教科書をぬるのがわかりませんでした。

そこで、『すみぬりまつり』について調べてみました。戦争を一致団結して戦うための内容だった国民学校の教科書から、戦争教材や国家主義的な意味合いが強い部分を切り取ったり、すみでぬりつぶして使っていたことがわかりました。終戦後は、物資も不足し、新しい教科書を作るのがお金や時間のことからできなかつたという事もわかりました。僕は、どうしてぬりつぶすのだろう、そのまま残しておいてもいいのにと思いました。でも少し考えてみると、きっとこれまでの、しっばいや悪いことをしたときのことを反省して、すみをぬること『すみぬりまつり』というのかなと思えました。最初は少し、楽しそうだなと思いましたが、いやな作業だったのだと思います。

さらに読んでいくと、少したけ野球の話を見つけた。くわしく読んでみると、試合などの話がありました。僕自身も野球をやっている、たくさん試合に出ました。勝つとすごくうれしい、負けることもやしい。戦後プロ野球での試合は東軍と西軍があり、東軍が西軍に勝ちました。勝った東軍は、すごくうれしいと思います。でも、負けた西軍は、すごくいやしくなると、気分が悪くなると思います。僕は、戦争が終わって

まだ日にちがたつていない中でプロ野球ができたのがすごいと思いました。ほくにはぜったいに無理だと思いました。

僕は、学校に勉強に行くのは、とても苦手でした。でもこの時代は、学校に行きたくても行けなかつた子たちがたくさんいました。なんでそんなに学校に行きたいのかなと思えました。学校まで行くよりも、歩いても歩いて通っていたそうです。僕は、すごいと思えました。むかしは、やりたいことも、自由にできなかつたのです。くわいそうだと思います。僕はずいぶん人たちがだと思えました。むかしの人たちは、すごくいろいろなことをのりこえてきているのだな、この本を読んで思いました。

書名『瀬戸内少年野球団』

阿久 悠 著

〔寸評〕

やりたいことが自由にできない時代と、自由にさまざまな活動ができる現在。この本から、今の時代の良さがわかったと思います。昔の人は不自由な生活の中でも辛さを乗り越えて生きてきました。本当にすごいことです。今、私たちが感じている辛さや「無理だ!」と思ってしまうことの中には、すぐに解決できるものがあつたりもします。少年団活動の中や普段の生活の中にも、辛さを乗り越えるヒントが隠されています。これからもさまざまな活動を体験する中で、見つけてみてはどうでしょうか。



■小学校6年生の部 最優秀賞

「なんでも」という言葉

弟子屈小学校 大越 愛梨奈さん



『いじめ—いつわりの楽園—』 図書館で本を選んでいる時、この題名が目に入り、私はドキッとしました。どんな内容なんだろうと気になって手にとってみました。表紙にはこう書いてありました。

『いじめ—いつわりの楽園—』 この本のおおまかなあらすじは、主人公の目下葵が通う学校で石川あかり(あかり姫)を中心にした「あかり王国」があり、葵が王国内のいじめに気がつき、勇気をかりしほって行動するという話です。

私がこの本の登場人物で一番気に入っているのは主人公の目下葵で、彼女のセリフの中で一番好きなのは、

「あなたは、友達を愛さない。あなたにとって友達は、自分を輝かせるための道具に過ぎない。でも、違つたよ。人には心があるの。誰にでも、宝物のように大切に守らなきゃいけない心があるのよ。それをあなたはわかっていないの。」

というセリフです。このセリフはクライマックスに葵があかりに投げかける言葉です。私は「友達とは心からわかりあうことができる、大切な仲間、自分と同じ場所に立つ存在である」と思つたので、葵のセリフにその通りだなと感じました。

もう一つ気になったセリフがあります。そのセリフは家で居場所がない女の子、阿部葉月の

「これからもあかり王国にいられるのならなだつてやる」

という心の中の言葉です。私はこの言葉にふれ、葉月の考え方は間違っていると思えました。たしかに私も尊敬する人とずっと一緒にいたいとは思いますが、

「なんでも」ということは人をいじめたり、殺したり、何をしてもいいということになってしまいます。実は私も友達にこの言葉をつかたことが何回もあります。例えばケンカをした時、「ごめんねとあやまっても許してもらえない時」

「なんでもするから……」

「なんでも……」

この本を読み、生活にいかしていきたくところがある二つありました。

一つ目は、いじめは絶対にいけないという事です。いじめはやられている人のことを考えるとできるわけがないと思います。それにいじめられて自殺してしまう人もいます。いじめは絶対にいけないと思います。もし、私が葵のようにいじめが起きていることに気付いた時、見て見ぬふりをするのではなく、勇気をかりしほって行動したいです。それ

て私もちゃんと友達の力になれるようになりたいです。

二つ目は

「なんでも……」

という言葉を使う時はよく意味を考えて使うということです。なぜならいじめなども

「なんでも……」

の中に入るからです。「なんでも」という言葉は軽いように聞こえますが、とても重い言葉なのです。私はちゃんと言葉の意味を考えて話していきたいです。

みなさんもぜひ「いじめ」のシリーズを読んでみてください。

書名『いじめ—いつわりの楽園—』

武内 昌美 著

〔寸評〕

「なんでも」という言葉。何となく使っている言葉でも、受け取る人によっては嫌な気持ちになるかもしれません。大越さんは四月から中学生。友達とやりとりする時の言葉を考える機会が増えてくると思っています。言葉を大切にすると、友達との仲がもっと深まるかもしれません。言葉は自分だけのものではないからです。いじめについては、大越さんの言うとおり、絶対にいけないことです。友達の力になれるよう、この本を読んで学んだことを生かしていいと思います。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。

※児童の学年は、コンクールが行われた平成27年度当時のものです。